不登校中学生による高齢者宅の除雪支援／A地域

［経　過］

不登校生徒が学校活動以外で社会参加や成功体験を積む経験を作ることができないかと中学校の校長先生から相談があり、旭川市社会福祉協議会で行う除雪ボランティアの活動の調整を行った。

［目　的］

・不登校生徒の社会参加機会の創出
・福祉除雪の担い手確保

［内　容］

・不登校生徒とボランティア活動（除雪）のマッチング

［その後の状況］

中学生の自宅付近に住む、除雪の依頼者（高齢者）へ、生徒の事情を伝え、本人、保護者、依頼者、中学校、市社協で打ち合わせを行った。現在は、保護者と一緒に除雪活動に励んでいる。

不登校中学生による高齢者宅の除雪支援／A地域

実　績

（事業・活動の実績）

〇良かった点

① 学校以外での社会参加の機会が生まれたこと

・ボランティア活動という小さな一歩から社会参加を経験することで、社会的孤立の防止や不登校解消のきっかけにつながることが期待できる。

・地域の人から感謝される経験を通して、自分が誰かの役に立てるという実感を得られた。直接「ありがとう」と声をかけられる体験は、自己肯定感を育てる大きなきっかけとなることが期待できる。

② 福祉除雪ボランティアマッチング事業としてのメリット

・活動者が不足している中で、中学生が新たな担い手として期待できる。地域の除雪支援体制の強化にもつながる。

〇難しかった点・今後の課題

・依頼者、学校、保護者等に理解を得なければない。

・活動が中断するリスクがあるため、その際の対策を考える必要がある。

・除雪の必要ない時期にも同じような経験ができる機会があると良い。

総　括

不登校生徒の社会参加と担い手不足のボランティア、それぞれにメリットのある活動となった。同じような課題を抱える学校や地域はほかにもあると予測されるため、今回のケースを基にした仕組みづくりを行えると良い。

また、今回のマッチングは、地域で行われた会議体（第２層協議体）で中学校とのネットワークがあったからこそ、このような相談至ったと思われる。今後も様々な機関とのネットワークづくりを広めていけると良いと考える。

新旭川地区社会福祉協議会
地区ボランティアセンター設置に向けた取組／B地域

［経　過］

市民委員会の協力を得て「未来プロジェクト・生活困りごとアンケート」を約2,500戸に配布した結果、約60%の回答があり、258人からボランティアに協力ができると回答があった。

アンケート調査から地域の課題として挙がったものが、「除雪」「買い物」「ゴミ出し」などであり、把握した課題を地域居場所づくり推進委員会（第２層協議体）で共有し、地区ボランティアセンターを令和８年４月以降に始動できるよう準備している。

［メンバー］

地区社会福祉協議会、地区市民委員会、地区民生委員児童委員協議会、旭川市地域活動推進課、新旭川･永山南地域包括支援センター、ツクイ旭川東、地域活動支援センターあしすと、地域密着型特別養護老人ホーム新富宏生苑、緑ケアライフサービス、地域まるごと支援員

［目　的］

・除雪やゴミ出しなどの「ちょっとした困りごと」を、「身近な地域」「なじみの関係」で解決できる仕組みづくりを目指す。

・地域のネットワークを構築し、地縁組織だけに頼らない助け合いの仕組みづくりを目指す。

［内　容］

・地域住民への周知のほか、福祉事業所の利用者も除雪などのボランティアに協力いただけるように協議中である。

・福祉施設や事業所が地域のボランティアと依頼者をマッチングするコーディネーター（調整役）を担うことができないか協議中である。

新旭川地区には地域居場所づくり推進委員会がある！！

〇委員のメンバー構成は･･･

「新旭川地区市民委員会」、「新旭川地区民生委員児童委員」「新旭川地区社会福祉協議会」、「社会福祉法人」、「福祉事業所（障害、高齢：4事業所）」、「新旭川･永山南地域包括支援センター」、「地域まるごと支援員」がメンバー。

↓ 地域居場所づくり推進委員会で立上げと運営に係る協力が可能 ↑

地区ボラセン事業立ち上げ（新旭川地区社協）

新旭川地区社会福祉協議会
地区ボランティアセンター設置に向けた取組／B地域

実　績

〇良かった点

・地域の課題を、包括と地域まるごと支援員だけでなく、地縁組織と福祉事業所が協働しながら会議を実施し、協議を進めたことで、多角的な視点から意見をいただくことができた。

・新旭川地域居場所づくり推進委員会や、地区ボランティアセンター事業説明会のなかで、事業の主旨を丁寧に確認しながら進めたことで、地域住民による主体的な活動に繋がっている。

〇難しかった点・今後の課題

・継続して運営することができる仕組みづくりが必要である。

・若い世代（高校生・中学生なども含む）がボランティアに興味を持ってもらえるような工夫が必要である。

総　括

地域の負担のみが大きくならないように新旭川地域居場所づくり推進委員会と協力し、地域の困りごとを自分ごととして地域で支え合う体制を目指す。

施設×高校ボランティア　／C地域

［経　過］

施設のボランティアとして高校ボランティア部との連携を検討し、施設の軽作業（ウエス・たんぽ作成）を提案。施設と高校の顔合わせを行い、作業内容や連絡方法等を確認した。まずは段ボール１箱分を試行的に実施することとした。

［メンバー］

北海道立旭川子ども総合療育センター

旭川明成高等学校 インターアクト部（有志生徒）

［目　的］

・高校ボランティア部を地域の社会資源として活用

・施設の作業負担軽減と生徒の地域貢献機会の創出

・施設と地域（学校）がつながる第一歩とする

［内　容］

第1回ウエス作成作業を実施。放課後１時間、有志生徒８名が参加した。

成果としてカゴ約１個分のウエスを作成。生徒同士で協力しながら布の裁断作業を行った。後半は作業にも慣れ、作業ペースが向上し、楽しみながら取り組む様子が見られた。

施設×高校ボランティア　／C地域

実　績

（事業・活動の実績）

〇良かった点

・施設の作業負担軽減と生徒の地域貢献活動の機会づくりにつながり、双方にとってメリットや気づきのある取り組みとなった。

・来年度以降の活動継続の可能性については、意見交換を行いながら検討していくこととなった。

〇難しかった点・今後の課題

・施設と高校をつなぐコーディネート業務であったが、教育機関と福祉施設という異なる分野の機関を結びつける際の初回の関わりに難しさを感じた。

総　括

今回の高校ボランティア部との連携では、施設の軽作業支援と生徒の地域貢献という双方のニーズを結びつけることができた。コーディネート業務をとおして、地域まるごと支援員が、施設・高校双方との信頼関係を築く一歩にもなった。今後は、学校や施設、企業など多様な主体と連携できる活動を広げていくことが目標である。

ごくらくサロン（ふれあいサロン）送迎支援の取組／D地域

［経　過・目　的］

ごくらくサロンは菊の湯のロビースペースを活用して実施していたサロンだが、菊の湯の閉業により、令和５年４月から地域福祉活動拠点すずかけ１階に会場を変更し、サロン参加者数名が自家用車を使用して他参加者の送迎を行っている。

令和８年度より、すずかけの駐車場が使用不可となることから、サロンの送迎方法について検討していたところ、同時期に行った神楽岡地域近隣の福祉施設への実態把握訪問の際、老人保健施設グリーンライフに地域貢献活動の意向があることが分かり、送迎支援の協力について相談。その後打ち合わせを重ね、送迎支援（試行）の実施に至った。

［内　容］

令和８年２月１８日（水）ごくらくサロン開催時、送迎支援（試行）を実施。

ごくらくサロン参加者１５名の内、１２名の送迎を支援。グリーンライフからは職員４名と車両２台の協力があった。利用者からは、「ルートを事前に考えてくれ、乗り降りのサポートもあったので有難かった」といった感想が挙がっている。試行後、送迎利用者と協力者双方の感想や意見をすり合わせ、令和８年４月からの本格的な送迎支援のスタートに向けて調整を行っている。

ごくらくサロン（ふれあいサロン）送迎支援の取組／D地域

実　績

（事業・活動の実績）

〇良かった点

・事前の打ち合わせを行うことで、利用者宅の確認やルートの考案をすることができた。

・同じ地域内の福祉施設が協力してくれることで、地域住民と福祉事業所とのつながりが構築できた。

・元々送迎を行っていた方々（サロン参加者の一部）は全員高齢者であったため、人を乗せて運転することへの抵抗があったようだが、その不安を解消することにつながった。

・送迎サービス補償保険に加入したことで、送迎者、利用者双方の安心が確保された。
※保険料は神楽岡地区社会福祉協議会が支出している。

〇難しかった点・今後の課題

・これまでの送迎ルートとは異なったことや、乗り合うメンバーが変わったことから、戸惑いを感じている利用者がいた。

・今後も取組を継続していくにあたり、協力者側の負担が大きくならない方法を検討する必要がある。

総　括

この送迎支援では、地域住民が抱える困りごとを、地域貢献活動意向のある福祉施設が解決するという、双方の希望が叶う取組にすることができた。今後も地域の福祉施設や事業所をはじめ、福祉以外の分野の企業や学校等ともネットワークを築きながら、地域の課題を解決する仕組みづくり・取組を実施していきたい。